

半生の記

松本清張



はん せい き
半 生 の 記

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 109 L

昭和四十五年六月二十五日
昭和五十年六月二十日
発行

著 者 松 本 清 張

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三三)二六六五一
編集部(〇三三)二六六五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

半 生 の 記

松 本 清 張 著



新 潮 社 版

1909

目次

父の故郷	セ
白い絵本	一六
臭う町	二四
途上	三三
見習い時代	四二
彷徨	四九
暗い活字	五五
山路	六五
紙の塵	七三

朝鮮での風景	八
終戦前後	九
鵲	一〇
焚火と山の町	一一
針金と竹	一二
泥砂	一三
絵具	一四
あとがき	一五

半
生
の
記

父の故郷

昭和三十六年の秋、文芸春秋社の講演旅行で山陰に行った。米子に泊った朝、私は早く起きて車を備い、父の故郷に向った。これについて、以前に書いた一文がある。

——中国山脈の脊梁に近い麓まで悪路を車で二時間以上もかかった。途中、溝口などという地名を見ると、小さいときに聞いた父の話を思い出し、初めて見るような気がしなかった。

私が生山の町を初めて訪れたのは、終戦後間もなくだった。今は相当な町になっている。近くにジュラルミンの礦石が出るということで、その辺の景気が俄かによくなったということだった。

矢戸村というのは、今では日南町と名前が変わっている。山に杉の木が多い。町の中心は戸数二十戸あまりの細長い家並だが、郵便局もあるし、養老院もある。小雨の中を私の到着を待って、二十人あまりの人が立っていた。これがみな父の母方の係累にあたる田中家の人々だった。しかし私の見たこともない親戚筋の人たちばかりだった。父の従兄の家（田中家）に寄ると、山菜と赤飯で私の到着を祝ってくれた。父の従兄というのは、すでに八十九歳で、顔もどこか父に似ている。集った二十数人の「親戚」の人に挨拶され、紹介されたが、どの人がどういう筋合になって

いるのか一どきには理解できなかった。親切な人たちは私に近親感をもってくれ、父の生家や、父方の祖父母の墓に案内してくれた。柿の実のなった梢の下（しんが）の徑（みち）を歩いた。

父の生れた農家は、今は全く縁故のない人が住んでいるが、玄関は牛小屋の代りになっている。父は郷里を出てから、一度もこの家を見ていないのである。

村の中を日野川が流れているが、父の想い出話の中には、必ずこの川の名が出てくる。父の従兄は耳が遠く、全く話ができなかったが、以前に大病を患ったとき、家族がその録音をとったといつてそのテープを聞かせてくれた。その中に、幼いときその人が父と遊んだ話など出ている。

父は生れるとすぐ事情があつて、他家へ養子にやられた。父の実母は妊娠したまま一時、離縁になったのである。父が養子にやられたのは、そのためだろうが、そのへんのくわしい事情は分らない。何か暗い気持がする。「峯太郎は、小学校のころにはよく遊びに来よつたが、それから、いつの間にか来んようになった」

とテープの声は語っていた。そのころから父は故郷と絶縁したとみえる。

私は親戚の者から記念に何か書けといわれて、次の文句をしたためた。

「父は他国に出て、一生故郷に帰ることはなかった。私は父の眼になってこの村を見て歸りたい」

私は村の写真を写した。親戚は本家分家と入りまじっていて、誰が誰やら私に判別がつかないが、みんな村では相当な暮しをしている。父ひとりが生れながらに不幸であつた。――

父は峯太郎といった。生れるとすぐに米子の松本米吉、カネ夫婦のところに養子にやられた。当時、この夫婦はどういう職業に携っていたか分らないが、あとで考え合わせると、餅屋をやったこともあるようである。財産も土地も持たない貧乏所帯であった。田中家と松本家との関係は今となつては分らない。松本夫婦に子供がなかったことだけはたしかだ。

米子と日野郡矢戸村とは四十キロばかり離れている。現在のように伯備線は通じていなかったから、両家がどういう因縁で交際をしていたかは分らない。

峯太郎の母親は、同郡霞^{かすみ}というところにある福田家から来ていた。ここで長男峯太郎を産んだのだが、いかなる理由からか、母親は田中家から一時離縁されている。そして峯太郎を松本家に養子に出したあと復縁し、つづいて二人の男子を産んでいる。この分らない理由に想像をつければいろいろと考えられるところだ。

米子に貰^{もら}われて行つた峯太郎が、子供のころ、矢戸の実家にたびたび帰っていたことは、前記の峯太郎の従兄に当る田中老人の言葉の通りである。「小学校のころにはよく遊びに来よつたが、それからいつの間にか来んようになった」のである。なぜ、来なくなつたか。それは田中家のほうで峯太郎を忌避したのか、あるいは子供心にも峯太郎が暗い出生の事情を察して足を踏み入れなくなつたのか、その辺のところも分らない。

田中家は次男を失い、三男が育つた。この三男は嘉三郎^{かさん}といい、のち故郷を出て教員になつた。だが、父にはこの二人の弟と遊んだ記憶があるらしい。だから、それは小学校のころに遊びに来ていた時代と思われるが、二人の弟といつしよに峯太郎が寝ているのを、横に寝ている母親が

うれしそうに見ていたと私に話していた。

峯太郎と嘉三郎とはのちに広島で再会したが、このときは、嘉三郎は広島の高師範学校を卒業し、たまたま広島に居る峯太郎を訪ねたのだった。つづいて大分の中学校に赴任し、そこで妻を娶ったらしいが、それ以後は峯太郎とは全く会っていない。嘉三郎はのち教員生活をやめて東京に住み、今の学習研究社や旺文社のような、受験雑誌の出版会社に入った。そこで辞書その他の編集の才能を買われ、重役になって死んだが、その遺族は現在杉並にいる。

私の小説に「父系の指」というのがある。私小説らしいといえ、これが一ばんそれに近いが、私の父と田中家との関係をほとんど事実のままにこれに書いておいた。

峯太郎は、小学校を卒業するとすぐ役場の給仕に雇われていたらしい。そのころから、当時の習慣で漢文など勉強していたようだが、その給仕も間もなく辞めて郷里を出奔した。この辺からの話は、私が幼いときから父の手枕で寝物語に聞いたものに多い。もともと、どういう事情から彼が松本家を家出したか、それは義理の両親との間に了解があつてのことかどうかは私は聞いていない。

一体、矢戸村というのは、前の引用にも書いた通り、中国山脈の脊梁の北の麓である。いま、岡山方面から伯備線に乗って米子に向うと、備中神代という駅がある。その駅を過ぎると、すぐにトンネルに入るが、その上が鳥取県と岡山県の県境に当り、同時に分水嶺でもある。トンネルを抜けると、伯耆の国になり、生山駅につく。

傍らは「豪溪」という名の付いた「日野川」上流の溪谷となっている。雪舟が近くの寺に住ん

でいたという伝説がある。

家出した峯太郎は、その日野川に沿って米子から歩き、いま日野町となっている根雨から作州津山に出た。十七、八のころらしい。この路は出雲街道といわれ、同じく県境に四十曲の峠がある。

この四十曲から勝山、津山の路はぜひ私も歩いてみたいと思っているが、先年、講演旅行のときに泊った皆生温泉の宿に、横山大観の絵の消息文が額に収められてあった。その絵を見ると、大観が人力車に乗り、突兀とした山路を走っている図になっている。明治四十二、三年のことらしい。

さて、峯太郎の出奔は、生涯ふたたび郷里に足を入れることのない、最後になった。津山から大阪に歩いて行つたが、そこで何をしていたか私には分らない。次の父の話は、彼は突然明治二十七年の日清戦争のときに広島県の警察部長の家で書生となつてゐる。

その辺を想像すると、どうやら、峯太郎は法律を勉強して弁護士になる、ゆくゆくは弁護士の資格試験でも取るつもりだったらしい。このことは、私がかなり大きくなってまでも父が法律のことをよく口にしていたのでも分る。

或るとき、何のごたごたか知れないが、人が来て玄関先で父と争つてゐた。そのとき、父は何か法律上の条文を持ち出したらしい。今でも、その九州の家のうす暗い玄関で、父が端然と坐つて応対している姿を思いだす。相手は、なに、法律だつて？ 法律を持ち出されてはお仕舞いですな、そんなら、わたしのほうもそのつもりで出直しましょう、と啖呵を切つて壊れかつた格

子戸を手荒く閉めて行ったことを憶えている。

しかし、その法律勉強も警察部長の転任で挫折し、あとは広島衛戍病院の看護雑役夫の生活になっている。

「寝台に横たわった病人や怪我人が、夜中に水をくれ水をくれと言うて、ちよつとも寝かさなんだのには往生した」

と父は言っていた。

それから先はどういう生活になっていたかよく分らない。しかし、相変らず底辺で蠢いていたことはたしかなようだ。そのころであろう、峯太郎は、広島県賀茂郡志和村出身の岡田タニと結婚している。

私は父の故郷を二度訪れているが、まだ母の故郷には行ったことがない。この志和村というのは、山陽線を通ると、昔の機関車なら瀬野と八本松の間で二台連結するほどに急な勾配となつている。志和は、その瀬野駅で降りてもいいし、八本松駅で降りてもいい。山陽線のこの辺を通るたびに、私は窓に寄つて母の故郷を望見する思ひになる。

岡田タニの実家は農家で、姉弟五人であつた。タニは長姉で、村を出てから広島で紡績女工をしていたらしい。目に一丁字がなかった。

「こまい(小さい)とき学校の先生に怒られてのう、それでとうとう学校には行かずじまいじゃつた。あとで先生がえろう迎えに来んさつたが、あるとき学校に行っちゃれば、少しは字が読めたにのう。うちら新聞が読めんけんなんにも楽しみがない」

とよく言っていた。

広島から峯太郎とタニとが九州小倉に移った事情はよく分らない。当時の九州は戦争後の余波で、まだ炭鉱の景気がよかったのではないかと思う。しかし、小倉には炭鉱がなく、もともと父は労働が嫌いなほうだった。それで、炭鉱景気で繁昌している北九州の噂を聞いて、ふらふらと関門海峡を渡ったのではないかと想像する。明治四十二年十二月二十一日に私が生れている。

相変らず両親の貧乏生活はつづく。もともと、子供は私一人でなく、私が生れる前に姉が二人いた。これは嬰兒のときに死亡し、結局、私だけが育ったというわけだ。

「これを見い。おまえが赤ん坊のときに、これを着せて育てたんだな」

母は古い葛籠をあけてボロ布片で綴り合せた嬰兒の襦袢を出してみせることが多かった。それは子供が育たないので、この子だけとはいうことから市内を巡礼してほうぼうの家の寄進で集めたボロ布片を襦袢に縫い合せたのだという。

次の私の記憶は、小倉から下関に移る。

今は下関から長府に至る間は電車が通じているが、当時は海岸沿いに細い街道があるだけだった。現在、火ノ山という山にケールカーがついて展望台が出来ているが、その場所が旧壇ノ浦といつて平家滅亡の旧蹟地になっている。そこに一群の家が四、五軒街道に並んで建っていた。裏はすぐ海になっているので、家の裏の半分は石垣からはみ出て海に打った杭の上に載っていた。私の家は下関から長府に向つて街道から二軒目の二階家だった。

どういうわけか分らないが、このころ、米子に居たはずの松本米吉とカネとが呼ばれて、この

家に同居している。そこで街道の通行人を相手に商いをしたのが餅屋であった。

父はそのところどのような職業に携っていたかよく分らない。もともと労働が嫌いで、後年、私の記憶のはっきりするころには米相場や無尽会社みたいなことをやっていたから、楽をして儲けようという気持があったらしい。

私にとって義理の祖父に当る米吉には記憶がない。遠い、おぼろな思い出の中には、二階の一間に蒲団が敷かれ、影のような人間が並んでいたことを憶えているが、それが祖父の臨終だったのかもしれない。

「おまえはじいさんとは言えないで、イーヤンと呼んでいた。死ぬ前のじいさんはおまえを見て、いくらイーヤン、イーヤンと言うても、もう返事ができんわい、と言うていた」

と母から聞かされたことがある。

家の裏に出ると、渦潮の巻く瀬戸を船が上下した。対岸の目と鼻の先には和布刈神社があった。山を背に鬱蒼とした森に囲まれ、中から神社の甍などが夕陽に光ったりした。夜になると、門司の灯が小さな珠をつないだように燦く。

母の妹がいて、その亭主が鯨のボテ振りをしながらこの辺まで来て、よく店先で休んだ。手首に桃の刺青があった。酒をよく呑む男であった。

ついでに言う、母のたった一人の弟は九州で炭坑夫となり、すぐ下の妹がこの魚の行商の女房であり、その下が山口県三田尻というところで陸軍特務曹長の女房だった。その次の妹はそのころ行方不明になっている。

この妹というのが、一日、私を乳母車に乗せて街に出たが、私を放ってふいと姿が見えなくなつたそうである。後年、この妹がいい年齢になつて姉たちと再会したが、そのときの心理を訊かれて、

「姉さんがあんまり口やかましいから」

と言つたそうである。実際、母親は口やかましい人だつた。それに絶えず心配性だつたのは、父があまりに吞氣にして家の手伝いには見向きもしなかつたからであらう。私の幼時の両親への記憶は、ほとんど夫婦喧嘩で占められている。